

## 建築と自分～東日本大震災を経て～

東京理科大学大学院工学研究科建築学専攻修士1年 井上 瑛文

建築は、いつの時代でも、人と社会に密接に結びついている。ある土地に人が集まり、家を造って、そこに定住し、町が形成される。この流れはいつの時代でも不変で、今後も続いていくものだと考えられる。こうして「土地」、「人」、「建築」の間に切っても切れない「つながり」ができる。しかし、こういったつながりを瞬く間に破壊してしまうのが、災害である。

2011年3月11日の東日本大震災、つまり東北地方太平洋沖地震が日本を襲った。東日本の広範囲にわたり大きな揺れ、想定外の巨大な大津波によって無数の建物が倒壊、町は壊滅的に破壊され、非常に多くの人命が奪われた。そしてこの震災は多くの「つながり」を奪った。

地震発生と同時に、東京にいた私はちょうどテレビを見ていた。NHKの地震速報では、東北の太平洋沖で大きな地震が起こる、マグニチュードは9程度、そう報じられていたと思う。東京まで到達した揺れでさえ非常に大きく、高層ビルが揺れる様を見た人はこの世の終わりかと思ったなどとも言っていた。

マグニチュード9の報道を見た瞬間、あ、みんな死ぬ、そう悟った。何がそれを思わせたかは、言うまでもなく大津波だ。私は高校の物理の先生が言っていた言葉を思い出した。「津波は、波乗りなどの表面波とは性質が全く違う。1mの表面波ならば、人が受けてもなんともないが、それがもし津波なら、下手すれば死ぬ」と。そのときはじめて津波とはとめどなく押し寄せる膨大な量の水の塊であることを知った。

一番初めに報道された津波の高さは10m以上、それがどれ程のものなのか自分にはわからないが、自分がその場にいたら、ただただ全力で逃げたと思う。そう思ったのと同時に津波の性質を認識している人はどれくらいいるのだろう、そう思った。テレビの画面には、津波がそこまで来ているのに呑気に歩いている人がたくさん映った。知っているか知らないかが生死を分けた出来事だと思った。

この震災を通して、自分の中の考えが変わった。自分は大学4年間で建築を勉強してきたが、この震災に遭って被害を受けた人たちに出来たことはおそらく何一つない。むしろ何一つできなかった、そしてそれがくやしくて堪らなかった。ソフトバンクの孫社長など、多額の寄付をできるわけでもなく、実際に現地で自衛隊隊員のように復旧活動ができるわけでもない。どんなに思ったって行動できなげりや伝わらないし、何にもならない、そう思い知らされた。だからその時は諦めた、今は力がない。だからこそその時、この先必ず起きる震災の時に、「直接」、被災者の人々の手助けができる、そんな力のある人間になる

と、そう心に誓った。

自分は今、研究室で建築の構造について学び、研究し、来る地震に対する技術の開発に携わっている。想定外の地震に対して、建物を安全なものとするには莫大な費用がかかる。一人ひとりにそのような建築を提供できるならそれでいいが、そうともいかないのが現実である。そこで、地震によって被害を受けても、倒壊はさせず、修復して再使用できる、そんな建物の設計法の研究をしている。地震はその地域一帯に同時多発的に生じる。それによって同時に建物は損傷を受けるが、その度合いは建物によってまちまちであるし、建物の用途によってもその建物の修復が緊急なのかもしれないのかなどといった疑問が生じる。いまある基準では建物の詳細な損傷度、用途などは考慮されずに復旧の段取りが行われる。それでは緊急を要する避難所の提供などに必ず支障をきたす。一見、見た目はひどくても実はあまり損傷してない建物もあると考えられる。つまり、詳細な損傷度、建物の用途、建物の性能などを総合的に加味、判断する必要があるが、それができて初めて、どの建物から修復するかといった優先度を決められる。この優先度が緊急時避難所などの提供に大いに役立つと考えられる。

上に述べたような研究を通して、私は将来、構造設計者になりたいと考えている。学部4年、及び修士2年間で得た知識、経験、思ったり考えたりしたことなどを総動員して、建築の設計をしたい。ただまだまだ全くの未熟者なのは十分に自覚している。しかしいつかは、安全で快適な空間を提供することで、人々の生活を支え、震災時などは被災した人の力になれる、そんな一人前なカッコいい大人になりたい。